

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2021年1月21日

文責：JUN

ICTによる学びの保障とは？

あけまして おめでとう ございます

コロナ禍の多難な船出となった2021年（令和3年）が始まって間もなく1か月になります。状況好転の兆しは見えません。まだまだ、子どもたちを感染させないことと学びの保障、この二つの両立のために心を砕いていかなければなりません。大変だと思いますが、未来を担う子どもたちの教育に携わるといふ教師の誇りを胸に、できないことを見つめるよりも、できることを見つけて取り組んでいきましょう。

1 オンライン授業とすべての子どもの学びの保障

GIGAスクール構想が前倒しになり、1人1台端末配備が全国的に進められています。それにつれて、IT技能育成の講習とか、授業への活用事例の研修とかも進められつつあるのではないのでしょうか。その際、ICT化は、「指導や学習の個別化」と「協働的な学び」との往還による「学びの最適化」を図るために活用されなければならないということを、本「学びのたより」前号において述べたのですが、その方向での実践が進むことを願っています。

そんな中、ある高等学校において、すでに1人1台の配備が完了し、今後は、積極的にオンライン授業にも活用していこうと計画しているという報道がテレビでされていました。そうすれば、不登校になっている生徒も自宅で学ぶことができるということでした。

なんらかの理由で、学校に来ることができない生徒がいて、その理由や状況によって、無理に登校させないほうがよいというケースが増えています。そういう生徒に対して、オンライン授業という方法を取り入れることによって学ぶ機会を保障しようという考えなのですが、すべての子どもの学びを保障するということから一つの前例になるでしょう。

ただ、その際考えなければならないのは、そのオンライン授業をどういうものにするかということです。もし、学校で行っている授業の様子がそのままオンラインで不登校になった子どもの端末機器に映し出されるというだけだったらそれでは不十分です。それでは、まるで教室で行われている授業を窓の外から眺めているような、テレビに映るドラマを見ているかのような、「観客席」状態になるからです。

そういうことを考え、ふっと感じたのは、登校し教室で学んでいる子どもでも「観客席」状態になることもあるのではないかということでした。教師が行っている授業が講義式であれば、その可能性はあります。それなら、教室で学んでいようが、オンラインで学んでいようが、あまり変わらないのかもしれない。そうすると、不登校の子どもたちの学びを保障するためだけでなく、教室で学んでいる

子どもの学びもどう保障するかまで考えなければなりません。

「主体的・対話的で深い学び」への授業改善は、当初、アクティブ・ラーニングと言われていました。そこには、小・中学校よりも高等学校の授業改善が色濃く反映されていたと聞いています。Society5.0時代、社会が求める人材は、主体的に取り組める人、創造的な発想の出せる人、チームになって協働できる人だと言われるようになりました。ただ知識量だけならAIを活用すればよいのだし、労働についてもどんどんロボット化していく傾向にあることを考えれば、人間には何が求められるのか何が大切なのかと考えたとき、そのように言われることは納得できます。

だから、知識量を増やす講義式の授業ではなく、生徒が主体的に協働的に取り組む学びが必要なのです。すでに、大学では、講義式からの脱却が進み、生徒がグループを組んで取り組むプロジェクト型学習が増えていると聞きます。社会と直結する大学にはいち早く変化が到来しているということでしょうか。となれば、その大学に学生を送り込む高等学校が次に変わらなければなりません。そういうことから高校へのアクティブ・ラーニング導入ということになったのだと考えられます。

高校の授業がそのような情勢に対応して授業改善が図られていくのは好ましいことです。そうなれば、講義式の授業は次第に少なくなっていくでしょう。そして、グループで課題に取り組む授業が多くなっていくことでしょう。そして教師は、生徒の学びと発見を促し支える働きをするようになるでしょう。

これからの高等学校教育はそういう要素が増えていくべきです。そのためどういう取組が必要かということになるのですが、本稿ではオンライン授業について述べているので、そのことについては別途考えていただくとして、そうなっていけば、不登校の子どもに対するオンライン授業の中身もまた違ったものになるでしょう。「観客席」にいるようなことにはならないと思うからです。

とは言っても、高校教育のアクティブ・ラーニングへの転換が一気に進むことは難しいでしょうから、講義式とまでは言わないにしても「一斉指導型」の授業はこれからも続くでしょう。そう考えたとき、当面のオンライン授業をどうすればよいか、よく考えてもらいたいと思います。

私の属する「東海国語教育を学ぶ会」が開いている月例会を、10月と11月、ハイブリッド方式で行いました。それは、参加者が集結している会場と各地の参加者をオンラインで結ぶ二重構造の方式にしたのです。その際、留意したのは、オンライン参加者が会場で行われる例会を「観客席から眺める」というようなものにしないということでした。つまり、会場でグループ協議するときは、オンライン参加者もブレイクアウトルーム機能を使ってグループ協議をする、全体で協議するときは、オンライン参加者にも発言していただく、できればオンラインと会場との対話もできるようにする、そういうふうにしたのです。

同じことが、不登校の子どもを対象にしたオンライン授業でも言えるのではないのでしょうか。ブレイクアウトルームによるグループの学びが可能かどうかは子どもの状況によると思われませんが、少なくとも、自宅にいる生徒の教室とのやりとりができるようにしないとイケないでしょう。観客席ではなく、学びのフィールドに立てるようにしないと、本当の学びにはならないからです。

オンラインでつなぐ、それだけでよいということではないのです。オンラインでつないで、どういう学びにするのか、その中身が問われなければならないのです。学びを保障しようとするならば、生徒との双方向性をつくることは必須のことなのです。

2 コロナ禍で存在感を増す端末機器

コロナウイルスによる感染症が国内で見つかられてから1年たちました。今はその第3波で、感染者数が極めて多くなり、人々は感染リスクにおびえる日々を送っています。その感染はどのようにして引き起こされるのかということについて、最近の研究で、飛沫による感染がほとんどで、その飛沫がどのように飛ぶのかということもわかってきました。

先日、向かい合う状態で何人かが座席に座っているとき、感染の危険性の高い席はどこだろうということで、コンピュータによる実験をした映像を見ました。そうしたところ、これまでは正面の席がもっとも危険性が高いと言われていたのですが、横の席も同じくらい飛沫を浴びるという結果になっていました。また、会食による感染者についての追跡調査もされていて、そこでは、向かい合って座ってはいても、正面ではなく斜めにずらしての対面だと感染しにくいという結果になっていました。

そういった実験結果や追跡検証結果によって、とにかく最も感染の危険性が高いのは飛沫を浴びることで、それは正対する場合だけでなく横並びも含めて避けるようにすればかなり感染のリスクは抑えられるということが明らかになっていました。ただ、「密」状態にならざるを得ない小・中学校における感染が少ない一つの理由に、学校の指導が行き渡り、すべての子どもが厳密にマスクをしていることがあると報じていましたが、本当のところはわかっていないようでした。

そこで考えなければいけないのは、机を向かい合わせにするグループによる学びです。感染のリスクがあるということでグループにすることは避けるようにということでそれはわかるのですが、それではいつまでたっても「主体的・対話的で深い学び」ができません。そのため、行われるようになったのは、机を離してグループにするといった工夫でした。それ以来半年を経過しましたが、そのことによってクラスターが起きたという事例は耳にしません。そういうことから、マスクをして、大声を出さないグループで、しっかりした対策をとればできないことはないと考えられますが、それも、グループが止められている地域もあるほどですから、それぞれの地域の感染状況をよく見て判断しなければなりません。

ところが、グループの学びがもっと安心してできる状態がもうすぐ生まれるのです。それは、1人1台端末配備です。この配備は、本来はオンライン授業が目的ではありません。通常の授業において、ICTを活用するためのものなのです。

右の写真をご覧ください。4人の子どもがグループを組んで学んでいます。その子どもたちが全員、タブレットを操作しているのです。タブレットの画面には、なんらかの図のようなものが映っていますが、よく見ると、右の子どもと左の子どもでは映っている画像が異なっています。それでいて、右の子どもの視線は、隣の友だちに向いています。

つまり、これは、共通の課題に対して、それぞれがこれだと思ふ資料を映し出して、それで



気づいたことを出し合っているのです。

この授業の教科は社会科です。社会科の課題探究に際して大切なのは「資料」です。課題について考えるとき、想像するだけで終わったり、説明されている文章を読んで鵜呑みにしたりするような学習では探究になりません。そこで、必要になるのが資料です。それも、文章で解説されているものではなく、グラフや図になっているものです。写真の場合もあります。

かつてのOECDの学習到達度調査(PISA)の読解力の問題に、「チャド湖の水位変化」と「サハラ砂漠のロックアートに描かれ野生動物の変化」という二つのグラフが示され、そのグラフを読み解いて設問に答えるという問題が出されました。

その二つのグラフには、そこから読み取れることは何も説明されていません。つまり、それを子どもたちに読み取らせようとしているのです。子どもに発見させようとしているのです。それが読解力だというわけです。

日々の社会科の授業でもそうあるべきです。子どもが、自分たちで、資料から見つけ出す、そうすればまた新たな疑問が浮かび上がり、そうしたらまた資料を探し出して資料から発見する、そういう学びになります。

そういう学習を、一人ひとり個別で行うことができるかということ、困難になってしまう子どももいるでしょう。だから、グループを組んで、対話的な学びにするのです。前ページの写真の子どものように、それぞれが別の資料を映し出して、それぞれに発見したり、それぞれの資料をお互いのタブレットに送り合って比較して考えたり、そういったことが1人1台あるとできるのです。

前ページの写真は今年の2月なので、まだコロナ禍に入った頃ということで、マスクはしているもののいつもと同じように机をくっつけていますが、今ならもっと机を離れたグループになることでしょう。それでもタブレットによる学びであれば学び合うことができます。

まず、同じグラフを見て気づきを出し合うとしても、そのグラフは個々のタブレットに映し出すことができます。グラフのここがこうだと示すことも、タブレット操作でできるし、言葉を書き込むこともできます。つまり近づき合わないでも、対話的学びができるということです。

タブレットの配備されていない学校で、机を離れたグループだととてもやりにくいという声が子どもたちから出ているそうですが、タブレットを使えばそういうやりにくさも解消できます。もちろん、教師も、子どもたちがどういう学び合いをしているか、手持ちのタブレットからとらえることができ、よりよい対応につなげることができます。

つまり、1人1台端末は、コロナ禍で大変な存在感を有しているのです。オンライン授業とかデジタル教材ばかりが目立っていますが、1人1台端末の良さはそういうことではなく、探究的に仲間と学び合う学びにおける存在感のほうが大きいのです。

1人1台端末は、この4月には、大半の学校で実現するでしょう。それは、日本の教育にとって、大きな転機です。それだけに、「一斉指導型」「講義式」のままの導入にしてしまうのか、「主体的・対話的で深い学び」具現化のために活用させるのか、その違いは大きなことになります。

子どもたちを、コンピュータに従属させてはなりません。コンピュータを活用して発見し創造する「探究的学び」のためのツールにする、その志を教師が持たなければならないのです。教育のICT化が進む2021年度は教育の未来型への転換点になりそうです。それだけに、どういう未来型にしていくのか、それが問われることになると考えたいものです。